

夏の学校の今後を考える

副事務局長 中尾光(北大)

公募企画@宮城蔵王ロイヤルホテル

2013年7月29日

目次

- 夏の学校の概要
- 夏の学校事務局の構成
- 事務局の仕事内容、夏の学校準備のスケジュール
- 事務局の負担とその問題点
- 問題点の解決策
- 今後の対策について議論

夏の学校とは

- 大学院生を中心とした若手研究者による研究会
 - 参加者350人の大規模な研究会となっている
- 大学院生による事務局によって運営

夏の学校の目的

- 参加者の研究を促進する
- 若手研究者同士の交流を深める

大学院生にとって有意義な研究会ではあるが、運営する事務局の負担は膨大！

事務局の地区割り

市外局番により地区割り

- 01,02地区
 - (北大、弘前大、東北大、筑波大、茨城大)
- 03地区
 - (東大本郷、東大ビックバンセンター、宇宙研、東京理科大、中央大、立教大)
- 04地区
 - (東大三鷹、国立天文台)
- 05-06地区
 - (名大)
- 07-08地区
 - (京大、愛媛大、九州大、鹿児島大)

現状では博士課程に進学する学生は
1度は事務局を経験する

事務局の構成(2013年度)

- 4役(校長、教頭、事務局長、副事務局長)
 - 申請書の作成、予算編成、全体の仕事の把握
- 会場係(東北大)
 - 会場選定、会場準備(ホテルとの連絡、物品調達)
- 寄付広告、会計係(茨城大)
 - 予算編成、旅費参加費などの金銭の管理
- レジストレーション係(北大)
 - レジストレーションの準備、参加者情報のまとめ
- 広報、集録係(筑波大)
 - HPの整備、プログラム集、アブスト集、集録の作成
- 分科会係(新潟大)
 - 座長団、招待講師とのやり取り、分科会運営
- ポスターセッション係(弘前大)
 - ポスターセッションの準備、運営

4役+各係長、副係長からなるコアメンバーを中心に準備

夏の学校までのスケジュール

- 2011/11 : 4役決定
- 2011/12 : 第1回コア会議
- 2012/02 : 会場選定開始 1年前
- 2012/07 : 会場決定

- 2012/09 : 予算案作成開始 最初の公式な締め切り
- 2012/11 : 予算案作成、基研へ申請書提出
- 2013/05 : レジスト開始
- レジスト以降 : 旅費補助額の決定、時間割・プログラム集などの作成、契約内容の最終チェック、当日マニュアルの作成、などなど仕事多数

事務局の負担

- 夏の学校の準備には1年以上かかる
- コアメンバーによる全体会議は15回(1回2時間以上)
- メール数も膨大
 - 4役メール1000通
 - コアメール3000通
 - レジスト係メール1000通
- 年によっては体調を崩す事務局員も出る
- 参加人数の増加することで予算編成、分科会運営の負担が増していく

今後さらに夏の学校が大型化が進むと、開催が困難になる

事務局の負担が減らない原因

- 事務局が毎年代わり、かつ5年周期であるため、事務局内に経験者がいない
- 準備に1年以上かかるため、次年度に反省が反映されにくい(特に会場選定)
- 収容できるホテルが少ないため、会場が駅から遠くなり、旅費補助のための予算確保等で予算編成が難しくなる(例年事務局に近い地区で会場選定が行われている)

それぞれの原因に対する解決策はないか？

事務局が毎年代わり、かつ5年周期である為に、
事務局内に経験者がいない

- 解決策1

持ち回り制を廃止し、大学毎に係を固定する

- メリット

- 大学内に経験者が多数おり、毎年洗練されやすい

- デメリット

- 人数の多い特定の大学に担当が集中する

事務局が毎年代わり、かつ5年周期である為に、
事務局内に経験者がいない

- 解決策2

事務局のサイクルを5年以下にする

- メリット

- 少数だが大学内に事務局経験者がいる

- デメリット

- 人数の多い特定の大学に担当が集中する
(3年周期であれば実質、東大、名古屋大、京大)

事務局が毎年代わり、かつ5年周期である為に、
事務局内に経験者がいない

- 解決策3

次年度の事務局も前年度の事務局に加わる

- メリット

- 仕事内容、スケジュールの把握が可能
(4役の経験としては、実際に手を動かしていないので
効果が薄い)

- デメリット

- 実際に仕事をするならば、負担増

準備に1年以上かかる、ホテルが少ない

- 解決策1

前年度の夏の学校で次回の開催地を発表するという習慣を撤廃(ss14では実施)

- メリット

- 準備開始を少し遅くすることが可能
 - 前年度の反省を活かすことができる

- デメリット

- 夏の学校でのイベント?が1つ減る
 - トータルの仕事量は変わらない

準備に1年以上かかる、ホテルが少ない

- 解決策2

会場を都市部に固定

- メリット

- 会場選定作業が無くなる
- ホテルとのやり取りも減少
- トータルの旅費額を抑えられる
- 旅費の見積も前年度のものを利用できる

- デメリット

- 会場の魅力が減る

準備に1年以上かかる、ホテルが少ない

- 解決策3

- 合宿形式の撤廃

- メリット

- 会場選定の条件が緩くなる
 - 宿泊に関する業務が無くなる
 - 夜の分科会の準備が必要なくなる
 - 飲みに出歩くことができる

- デメリット

- 夏の学校の利点が1つなくなる
(他の研究会との差別化が難しくなり、予算獲得に影響)
 - 夜の分科会が無くなる

議題

- 来年度以降に我々が取るべき対策について議論する
- ss14で現在考えている対策について議論しましょう

ss14で予定している対策

- 会場を5年周期で固定する。
 - メリット(5年後以降)
 - 会場選定作業が無くなる
 - ホテルとのやり取りも減少?
 - 旅費の見積も5年前のものを利用できる?
 - デメリット
 - 5年間は問題が解決されない
 - 5年後には同じ条件が満たされないかも